

4. 当科における自己末梢血幹細胞移植術施行例の臨床検討
(小児科学教室) 有瀧健太郎、松浦恵子、宇塚里奈、

長島千香子、加納美穂、鶴田敏久、河島尚志、星加明徳

目的・方法：1993年より2000年に当科施行の自己末梢血幹細胞移植術 (auto-PBSCT) について検討を加えた。症例は17例 (19回)、男児9例 (10回)、女児8例 (9回)。疾患はALL5例、脳腫瘍5例、骨軟部腫瘍3例、神経芽細胞腫2例、NHL2例。

結果：生着は1例を除き認め、平均12.7日であった。移植合併症で1例が早期死亡、1例が重篤な後遺症を残した。1st CRの9例中7例および、2nd CR以降で移植した4例中3例が寛解維持と、良好な結果を示したのに対し、残存症例は全例再発ないし再燃し、寛解維持例はなかった。

結語：auto-PBSCTは、小児の造血器・悪性疾患に対し、有効な治療であると考えられるが、重篤な合併症もあり、また移植病期が予後を左右するため、今後適応について検討を要すると考えられた。

5. 血友病患者の上部消化管出血—最近14年間の検討—

(臨床病理学教室) 内田泰斗、川田和秀、新井盛夫、大石 毅、佐々木昭仁、山中 晃、守谷研二、藤田 進、萩原 剛、天野景裕、西田恭治、福武勝幸

【目的】血友病患者における上部消化管出血の臨床的検討を行なった。

【対象】1986年～1999年まで、通院歴のある血友病患者319名のうち、上部消化管出血を呈した73例 (39名) を対象とした。

【結果】上部消化管出血の発症率は2.87%/人年、発症時年齢は12～80歳 (中央値37歳) で、血友病A66例 (36名)、血友病B7例 (3名) であり、前者に頻度が高かった ($p=0.027$)。血友病の重症度は、重症44例 (25名)、中等症26例 (11名)、軽症3例 (3名) であった。重・中等症13名 (33%) に2～7回の再出血がみられた。初発症状はタール便が最多であった。65例 (89%) において内視鏡検査が施行され診断されたもののうち、出血源が不明であった11例 (17%) は重症の9例、中等症2例であった。治療は凝固因子製剤の補充療法等が行われ、消化管出血による死亡例は認めなかった。

【結語】重・中等症の血友病では、上部消化管出血の再出血が多く、器質的病変を確認できない症例もあった。